

随 想

## 長崎追憶の記

林 文子

私は、昭和31年から35年にかけて4年間、長崎大学放射線医学教室に在籍していた。はじめの半年は浦上地区の上野町に住んで居た。大学病院の裏門から民有地にはさまれた崖沿いの細道を経て、医学部のキャンパスの中を通り抜け、浦上天主堂の下へ出る道を通った。故永井隆先生のわずか2畳のお住まい、そして病室でもあった如己(ニョコ)堂を右手にみて西へ10メートルほど行った先を右折し、緩い坂道を50メートル上がると、道の左側に新築2階屋6世帯のアパートがあった。1階奥の私の部屋からは、道路を隔てた向い側に男子高の長崎南山高校と神父達の館が望まれるところで、裏手に家主の藤田さん宅が在った。浦上天主堂のまわりには、焼け落ちた瓦礫(ガレキ)がまだ残っていたが、近くに文化会館が建てられ、原爆の遺品などが整理陳列されていた。平和公園にも草花や若木が植えられ、堂々たる平和の像も真新しく若々しく見えた。

長崎は南北に長い山壁(ヤマヒダ)に囲まれた町であり、坂の町である。原子爆弾の爆心地は、カトリック教徒の多い浦上地区・長崎医科大学のある所で、投下目標からはずれ山壁を越えて炸裂したために、おくんち蛇踊りで知られる諏訪神社や片淵町あたりから寺町地区を助けたことになったが、私は週1～2回市電に乗って片淵町に建ったばかりの長崎原爆病院へ、診療のお手伝いに出かけていた。沢山の患者さんのなかに、佐世保市から入院してきた服飾デザイナーの元気で美しかった姿が印象的であった。私と年齢が近かった彼女は、若いうえに洗練された美しい、すがすがしい女性であった。彼女は入院した日、撮られた胸のX線写真とともに放射線科の診察室へまわされてきた。正面像のX線写真と私の問診の限りでは全く健康そうに見えた。なにか訴えがたい面もちで、まっすぐ私の顔に視線を向けながら、私の右の手をとり、人差し指を彼女自身の胸に押し当てた。彼女の胸の脇の何番目かの肋骨に、硬い膨らみを感じた私は声なく、しばらく動けないでいた。「手術していただけたら、でももうい

いのです。私一人が残ってたのですから……」と言われて、危うく涙をみせる  
ところだった。その後、信じがたい速さで病が進み、昇天してしまった。

波立つ感情にうろたえてばかりいた自分の不甲斐なさを刻み込んだ痛烈な思  
い出である。

(健康文化振興財団理事長)